

## 「家庭経営（家庭経済学を含む）」（相模女子大学 栄養科学部 健康栄養学科） における「家政学原論」的な視点について

臼井 和恵

相模女子大学 学芸学部 食物学科においては、「家政学士」の称号を用いていた平成 13 年度までは、家政学基本科目として「家政学原論」は必修科目であったが、現在では科目として存在しない。平成 14 年度からは学士(食物学)に変更し、平成 20 年度からは学士(栄養学)となった。食教育への特化、食の専門性を高める、という方向を掲げてのカリキュラム改正であったが、食を根本から支える生活そのものと食の主体である人間への視点が薄まってしまったことは皮肉なことである。そうした科目を守りえなかった自らがいる。

こうした状況の中で、「家政学原論」的な視点をいかに現行科目の中に入れ込んでいくかは、家政学関係の科目を担当する教員の課題であると思われる。その一例として、家庭科の教免資格科目（教職必修）として位置づけられている「家庭経営（家庭経済学を含む）」の場合を取り上げたい。

授業科目名 **家庭経営（家庭経済学を含む）** 1年生 春学期 2単位 講義  
担当 小野瀬裕子(平成 22・23)・臼井和恵(平成 24) 教免(家庭)必修・学科選択  
授業の到達目標・・・家庭の生活経営をはかるうえで必要な最新の情報を課題ごとに整理し、各自の目的に合わせて主体的に家庭経営の方策を考える。「生命・生活の論理」に基づいた家政学（Home Economics）の価値観についても伝えたい。

授業概要・・・省略

授業計画

1. はじめに 生命・生存・生活について考える 「生命・生活の論理」としての家政学  
→ここで「家政学原論」の視点について述べる。具体的内容については次ページに。
2. 男女共同参画社会における（家庭）生活経営 わたしを活かし あなたも活かす
3. 家族を考える 東日本大震災を忘れない
4. 女性が働く アンペイド・ワークとペイド・ワーク
5. 国民経済の中での「家計」 就職難やリストラの背景
6. ライフステージと家庭経済
7. 経済を整える ミニ家計簿をつけてみよう
8. 消費社会を生きる 消費者の権利を身につける
9. 環境と共生する 循環型社会の実現に向けて
10. 情報を活かす 情報リテラシー能力を身につける
11. 子どもと育つ 子どもの人権を守る
12. 老いを愛しむ 高齢社会の生活経営
13. 支えあって生きる リスクマネジメント
14. 地域でふれあう もうひとつの豊かさ コミュニティーとボランティア
15. まとめ サステイナブル（持続可能）な生活経営

## 授業概要 1. はじめに 生命・生存・生活について考える

### 「生命・生活の論理」としての家政学

☆ (家庭) 生活を経営する主人公、すなわち生活主体は当然のことながら人間である。生活経営は人間の「生命」が大前提になる。恩師田辺義一先生は「生活とは、生命を維持し、生存を全うするもろもろの営み」と定義された(田辺義一『家政学総論』光生館)。先生は家庭を「人間の生命維持機構」と捉える。人間という「種(Species)」の視点、「生命」の視点から生活の築き上げていくことの大切さを、まず確認したい。

☆ 生活のなかでも特に家庭生活に焦点を当てる根拠を、以下の言葉をヒントに考えてもらおう。E・グロールマンは、死にゆく人や死別を体験した人たちに、ファミリー・セラピストとして関わっている。クイズ形式で興味を惹くこともある。この言葉は、学生たちのところに素直に沁みていくように思われる。

子どもの死	— あなたの未来を失うこと	『変貌する家族』
配偶者の死	— あなたの現在を失うこと	5『家族の解体と再生』
親の死	— あなたの過去を失うこと	「家族のなかの死」
友人の死	— あなたの一部を失うこと	岩波書店

子どもの死が親にとって未来を失うほどにつらいという事実をしっかりと伝え、友人の死は自身の一部を失うほどであることから友人の大切さに触れ、これから始まる大学生活の4年間であなたの一部になるような友人と出会いたいね、と繋げていく。

☆ 私たちの生活は生存(生きていることの持続)に支えられ、生存は生命に裏付けられている。生命こそは生活の基盤なのである。このことを実感してもらうために、三角形のお結びの形を黒板に大きく書き、横に三つに区切り、生活・生命・生存がどの位置に入るかを問う。学生生活は生きていることの持続(生存)によって可能になり、生存は生命の持続であるから、一番下の土台には「生命」が入る。その上が「生存」、一番上に「生活」が乗る。この順番を間違えた場合、単位は無理でしょう、などと脅かすと、さすが新入生、ピツとなって黒板を見つめてかわいい。学業半ばで亡くなった古い教え子の思い出話をしたりして、私自身もしんみりしたりする。これら三つの言葉を英語では?と質問すると、「Life」と元気な返事が返ってくる。

☆ 文化人類学者の別枝篤彦氏の素朴で奥深い生活の定義もよく用いる。

「生活は主として、人間が生きていくための命の働きを実現していくための行為である。」

学生生活で困っていることはないか、命の働きが弱まってしまうような学生生活はいけない、命の輝きを増すために教育はある!と続け、学生の悩みを掬い取るようにする。

大学側の責任と覚悟もきちんと伝え、安心を与えるようにする。

☆ そしていよいよ「家庭を中心とした生活の学」としての「家政学」が登場するのである。

ユニセフレポートなどのより広い視野から、貧困や飢餓について触れることもある。

参考 『21世紀の生活経営 自分らしく生きる』同文書院

『生活文化の世界 人生の四季に寄せて』酒井書店